<論文>

美大生の絵画に対する美的評価は経済的価値観と審美的価値観のどちらと関連するか：名画と駄作を用いた検討

宮下達哉
木村　敦
山村　豊
岡　　隆

本研究の目的は、美大生の絵画に対する美的評価は経済的価値観と審美的価値観のどちらがより関連するかを実験的に検討することであった。調査では、14点の絵画（名画7点、駄作7点）に対する美的評価を測定した後、審美的価値観および経済的価値観を測定した（N = 230)。重回帰分析の結果、経済的価値観は名画に対する美的評価との関連がみられた一方、審美的価値観は名画および駄作に対する美的評価との関連がみられなかった。本研究の結果より、美大生の絵画に対する美的評価は経済的価値観と関連することが示唆された。

Keywords：美大生、審美的価値観、経済的価値観、名画、駄作

背景と目的

絵画に対する美的評価

我々は絵画を鑑賞した際、言葉で表せないような感動を覚える時があるだろう。こうした感動を言葉で表す場合、我々は「あの絵画は美しい」や「あの絵画は良い」といったような様々な評価語を用いる。こうした「美しい」や「良い」といった評価は、美的評価（aesthetic evaluation）として概念化されている。Berlyne（1974）は、美的評価は快・不快次元に基づいた対象に対する評価であると指摘している。すなわち、人が芸術作品（e.g.、絵画、音楽）を鑑賞し体験する言葉にならない感動は、快評価を基盤としており、そうした感動が様々な評価語で言語化されたものが美的評価である。

美的評価を構成する主要な評価語は、美しさ、快さ、良さ、好ましさの4つの形容詞であることが報告されている。例えば、筒井ら（2009）は、参加者に絵画を呈示し、それら絵画に対する美的評価を測定した結果、前掲の4つの形容詞間の相関係数は .76～.93（いずれも

0.1％水準で有意）の範囲であり強い正の相関があることを報告している。また、宮下ら（2018a、2018b）の研究は、筒井ら（2009）の手続きを踏襲し、絵画に対する美的評価を測定した結果、これら4つの形容詞から構成される美的評価尺度に高いα係数（いずれもα = .80以上）が認められることを示している。これら先行研究の知見をまとめると、美しさ、快さ、良さ、好ましさの4つの形容詞から構成される美的評価尺度には妥当性があり、これら4つが美的評価を構成していると考えられる。

絵画の美的評価と関連する審美的価値観

まったく同じ絵画を鑑賞していたとしても、ある人は「あの絵画は美しく好きだ」という一方で、別の人は「あの絵画は美しいが嫌いだ」というように、個々人で評価が異なる場合がある。すなわち、美的評価は個人差を含む。

美的評価における個人差について、価値観が個人差と関連することが議論されている。そうした価値観の1つが、審美的価値観（aesthetic dimension of value）である。審美的価値観は、個人が美しさを重視するかどうかをあらわす価値観である（Spranger、1921（伊勢田訳1961））。具体的には、審美的価値観の高さは、美しいかどうかという判断基準が個人の行動の中で最も重視されることを意味する。また、審美的価値観に重きを置く人は、美しいものに心をときめかせることを喜びとし（北原、1993）、絵画鑑賞のような芸術活動に対して強い興味関心を抱く（酒井、2001）。

これらを踏まえ、先行研究（宮下ら、2018a、2018b）は、芸術活動の1つとして絵画の美的評価に着目し、審美的価値観が絵画に対する美的評価と関連するか実証的に検討してきた。芸術経験のない一般の大学生を対象に調査を行った結果、審美的価値観の高い者は低い者に比べて、絵画の美的評価が高いことが一貫して示されている。

上述の先行研究のうち宮下ら（2018a）の研究は、絵画刺激として名画および駄作を呈示し、調査を行っている。その結果、審美的価値観の高い者は名画に加え駄作に対しても美的評価が高いことが示されている。この結果より、名画に対する美的評価について、審美的価値観の高い者は多くの人々に知られている有名な絵画を高く評価することが論じられている。対して、駄作に対する美的評価について、彼らは、知名度が低く価格がまだつけられないような絵画であっても、それらを描いた画家の制作意図を読み取ろうとすることが論じられている。これらより、審美的価値観の高い者は、絵画に描かれているモチーフや印象ではなく作品の制作背景や画家の制作意図に注目し、解釈に基づいて絵画を評価すると考えられている（宮下ら、2020）。

美大生の絵画に対する美的評価には経済的価値観が関連する可能性

前述の知見より、審美的価値観が絵画の美的評価における個人差と関連すること、そして、芸術経験がなくとも審美的価値観の高い者は低い者よりも絵画に対する美的評価が高いことを紹介した。

最近の研究は、芸術経験のある者として美大生の価値観に注目している。その価値観の1つが、Spranger（1921 伊勢田訳 1961）の経済的価値観（economic dimension of value）である。経済的価値観は、効率よく利益を得ることを重視する価値観である。また酒井ら（2018）は、経済的価値観は、金額の高さを重視することと関連することに加え、長期的な損得判断とも関連することを示唆している。

これらを踏まえ、経済的価値観に着目した先行研究（宮下ら、2021）は、宮下ら（2018a）と同様の名画および駄作を用い、絵画に対する美的評価と経済的価値観との関連を実証的に検討した。その結果、経済的価値観を重視する美大生の方がそうでない美大生よりも、名画および駄作どちらに対する美的評価も高いことが示された。この結果より、美大生の中でも経済的価値観を重視する者は、自身の鑑賞している名画の価格は高額なのか、また、いま現在は価格が低いような駄作でも長期的に捉えるとそれは今後高値がつくのかという点に重きを置いている。すなわち、経済的価値観の高い者は、金額の高さに加え長期的な経済的価値判断も重要な判断基準として、絵画を鑑賞する可能性が示唆された。

本研究の目的

先に論じた先行研究より、審美的価値観を重視する者はそうでない者よりも、名画や駄作といった絵画に描かれているモチーフや印象に左右されず、絵画に対する美的評価を高く行うことを紹介した。また、芸術経験のある美大生の中でも経済的価値観を重視する者はそうでない者よりも、絵画に対する美的評価を高く行うことを紹介した。

しかしながら、美大生の絵画に対する美的評価には審美的価値観と経済的価値観のどちらがより関わるか、両者を比較検討して包括的に議論した研究は報告されていない。芸術経験が必ずしも美的な価値観を規定するわけではないため（宮下ら、2016）、美大生の絵画に対する美的評価と審美的価値観との関連は低いと考えられる。また、美大生の中でも経済的価値観を重視する者は、絵画に対する美的評価を高く行う（宮下ら、2021）。これらを踏まえると、美大生の絵画に対する美的評価は、審美的価値観よりも経済的価値観と強く関連することが予測される。

これらより、本研究の目的は、美大生の絵画に対する美的評価は、審美的価値観と経済的価値観のどちらがより関連するか実証的に検討することである。また本研究は、絵画刺激の種類も要因として加えて検討する。具体的には、宮下らの研究（2018a）で使用された名画および

駄作を絵画刺激として用いる。

名画は、長い間多くの人々から親しまれ、かつ高く評価されてきた作品（石坂・高橋、2006）であるため、社会的評価を得ている。社会的評価の 1 つとして、名画には高額な価格がついている場合が多いといえる。経済的価値観を重視する者は、金額の高さを重要な判断基準とすることから（宮下ら、2021）、美大生の中でも経済的価値観の高い者は、名画に対する美的評価が高いと考えられる。

また本研究は、駄作美術館（The museum of bad art）（http://www.museumofbadart.org/）から選出した絵画を駄作として用いる。駄作美術館に収容されている駄作は、一般的にほとんど評価されていない絵画のみが集められたものであるため、人々から評価されてきた絵画なのか不明瞭であることに加え、現時点では価格がつけられない絵画がほとんどである。しかしながら、絵画が美術館で展示されることによって、そうした絵画が芸術作品として価値あるものと鑑賞者から判断されると考えられる。そのため、駄作美術館に展示された絵画は、芸術作品としてまだ日の目を見ていないだけで、潜在的な価値を有するとみなされると考えられる。さらに、宮下ら（2021）は、経済的価値観を重視する者は、長期的な損得判断に基づき「何年かすると駄作の価格が上がる」といった視点から駄作を捉えることを指摘している。これらを踏まえると、美大生の中でも経済的価値観の高い者は、駄作に対する美的評価も高いと考えられる。

仮説は次の通りである。経済的価値観得点が高ければ名画に対する美的評価得点も高くなる一方、審美的価値観得点と名画に対する美的評価得点との関連はみられないだろう（仮説 1）。一方、経済的価値観得点が高ければ駄作に対する美的評価得点も高くなる一方、審美的価値観得点と駄作に対する美的評価得点との関連はみられないだろう（仮説 2）。

方 法

調査対象者

首都圏 4 年制大学にて、美術学部の学生を対象とした。総回答者 231 名のうち、回答に欠損のない美大生 230 名（男性 99 名、女性 130 名、不明 1 名、平均年齢 18.91 歳、SD = 1.43 歳）を分析対象とした。

絵画刺激

調査で用いた絵画は、宮下ら（宮下ら、2018a、2021）の研究で使用された名画および駄作それぞれ 7 点の計 14 点であった（Figure1）。

Figure1　名画および駄作の例

質問紙

絵画に対する美的評価を測定する尺度、審美的価値観および経済的価値観を測定する尺度の順で綴じた質問紙を用いた。

（1）絵画の美的評価尺度　絵画に対する美的評価の測定には、宮下らの研究（宮下ら、2018a、2021）と同様に、筒井ら（2009）で使用された4つの形容詞対尺度であった。すなわち、「醜い―美しい」、「不快な―快い」、「悪い―良い」、「嫌いな―好きな」であった。これら4つの形容詞対は、9段階評定（左側：1点―右側：9点）で回答を求めるものであった。

（2）審美的価値観尺度　審美的価値観の測定には、酒井ら（1998）の価値志向性尺度を用いた。本尺度は、Spranger（1921）の提唱した6種の価値観（理論・経済・審美・宗教・社会・権力）を全72項目で測定するものである。その中から、「審美的価値観」を測定する12項目を抜粋して本研究で用いた。実際の項目には、「物事の美しい面を捉え、どうすればより美しさが際立つか考える」や「身の回りにある物の形や色に、強く心を引きつけられることがある」などが含まれた。回答方法は、「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」までの5件法であった。

（3）経済的価値観尺度　経済的価値観の測定には、審美的価値観の測定と同様に、価値志向性尺度（酒井ら、1998）を用いた。全項目の内、「経済的価値観」を測定する12項目を抜粋して本研究で用いた。実際の項目には、「目先のことよりも、長期的な損得を考えて行動する」や「重要な選択をする時は、プラス面・マイナス面を考えて、現実的に判断する」などが含まれた。

回答方法は、「あてはまらない（1 点）」から「あてはまる（5 点）」までの 5 件法であった。

倫理的配慮

質問紙調査を実施の際、口頭で、この質問紙調査は（1）個人が特定されないこと、（2）本研究に協力しないことによる不利益は一切ないこと、（3）成績評価とは無関係であること、（4）回答をもって本調査への参加同意とみなすことを伝え、カヴァーシートにも同内容を記載した。

手続き

授業時間内の一斉調査形式で調査を行った。回答の順番は、まず絵画の評定を一斉に実施した後で、価値観を測定する尺度への回答を求めた。

まず、絵画刺激を大型スクリーンに 1 枚ずつ呈示し、絵画作品の美的評価を評定してもらった。なお、呈示する試行数が少ない場合、ランダム化よりカウンターバランスの方が順序効果の防止に有効であるため（高野、2008）、全 14 点の絵画刺激の呈示はカウンターバランスにより統制した。具体的には、名画が呈示された後に駄作を呈示することによって、カウンターバランスをとった。絵画の呈示時間は、1 枚につき約 20 秒であった。参加者全員が絵画評定を終えたことを確認した後、価値志向性尺度へ回答を求めた。調査の所要時間は、教示も含めて約 30 分であった。

結　果

絵画 14 枚に対する美的評価を測定した 4 項目（美しさ、快さ、良さ、好ましさ）について、名画および駄作それぞれの信頼性係数 α を算出した。同様に、審美的価値観と経済的価値観それぞれの信頼性係数 α も算出した。α 係数から内的整合性に大きな問題がないと判断し、それぞれの尺度の合計得点の平均を算出した。これらの結果を Table1 に示す。

次に、審美的価値観および経済的価値観が絵画の美的評価と関連するかを検討するため、審美的価値観の得点と経済的価値観の得点を説明変数、名画および駄作に対する美的評価得点を目的変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。なお、多重共線性の問題がないか確認するため、Variance Inflation Factor（以下、VIF）を算出した結果、VIF = 1.00 であった。本研究では VIF が 10 を大きく下回っていたことから、多重共線性は無いものと判断した。重回帰分析の結果、名画において、重回帰式は有意であった（$F(2, 228) = 3.26, p < .05$）。決定係数は $R^2 = .02$ であった。経済的価値観の標準偏回帰係数が有意であったが（$\beta = .17, p < .01$）、審美的価値観の標準偏回帰係数は有意でなかった（$\beta = .01$, *n.s.*）（Figure2）。一方、駄作において、重回帰式は有意ではなかった（$F(2, 228) = 2.56$, *n.s.*, $R^2 = .01$）（Figure3）。

Table1　名画および駄作における美的評価得点と価値志向性尺度得点の記述統計（N = 230）

	M [95% CI]	SD	α
名画	191.86 [188.25—195.47]	27.78	.90
駄作	151.27 [148.13—154.40]	24.11	.89
審美的価値観	47.60 [44.88—50.37]	21.38	.69
経済的価値観	40.04 [39.35—40.73]	5.34	.74

注：美的評価の得点範囲は28—252。
注：審美的価値観および経済的価値観の得点範囲は12—60。
注：［95% CI］の列には、平均値の95%信頼区間の下限と上限をそれぞれ示した。

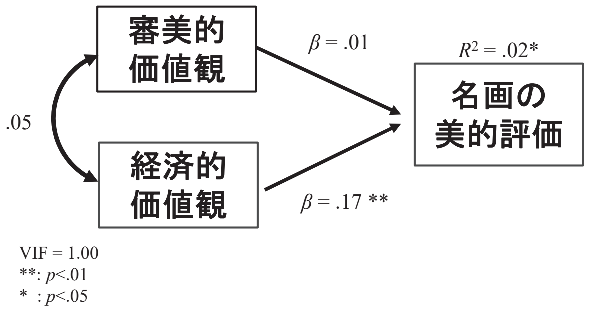

Figure2　名画の美的評価を目的変数とした重回帰分析の結果（N = 230）

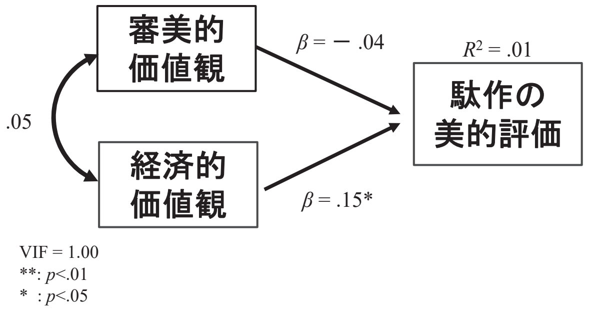

Figure3　駄作の美的評価を目的変数とした重回帰分析の結果（N = 230）

考　察

本研究の目的は、美大生の絵画に対する美的評価は審美的価値観と経済的価値観のどちらとより関連するかを実証的に検討することであった。

重回帰分析の結果、名画に対する美的評価では、審美的価値観との関連がみられなかった一方、経済的価値観との関連はみられた。また駄作に対する美的評価では、審美的価値観および経済的価値観のいずれとも関連がみられなかった。

これらの結果より、本研究の仮説 1 が支持された。すなわち、経済的価値観得点が高ければ名画に対する美的評価得点も高くなる一方、審美的価値観得点と名画に対する美的評価得点との関連はみられないという結果が示された。対して、本研究の仮説 2 は一部支持されなかった。すなわち、経済的価値観得点が高ければ駄作に対する美的評価得点も高くなる一方、審美的価値観得点と駄作に対する美的評価得点との関連はみられないという結果は示されなかった。従って、美大生の名画に対する美的評価は、審美的価値観よりも経済的価値観と強く関連することが示唆された。

名画に対する美的評価

本研究より、美大生の名画に対する美的評価は審美的価値観よりも経済的価値観と関連することが示唆された。本研究の結果は、宮下ら（2021）の研究結果を支持するものである。すなわち、美大生の中でも経済的価値観を重視する者は、絵画を評価する際、絵画が金銭的に高額であることに重きを置くことである。美大生は、大学等での美術教育を通じ、名画の価格や社会的評価を学ぶ機会が多い。こうした芸術経験と関係して、彼らは名画がもつ商業的な価値に関する知識を多く有すると考えられる。また、経済的価値観を重視する者は、長期的な経済的価値判断を有する（宮下ら、2021）。これらを踏まえると、美大生の名画に対する美的評価と経済的価値観との関連は、美術教育から得た知識や情報に基づき名画が今以上に高額な価格がつくのかもしれないという絵画評価の視点を含むものと考えられる。

一方、美大生の名画に対する美的評価と審美的価値観との関連は示唆されなかった。この結果は、芸術経験が美的な価値観を規定するわけではないという先行研究の知見（宮下ら、2016）を支持するものである。芸術経験のない一般大学生を調査対象とした宮下ら（2018a）の研究は、審美的価値観を重視する者は名画に対する美的評価が高いことを示唆している。対して、美大生を調査対象とした本研究は、審美的価値観と名画に対する美的評価との間に統計的な有意差を示していない。これらを踏まえると、美大生にとって名画は、「美しい」や「有名だから良い」といった一次元上の評価対象という位置づけよりも、「価格の高さ」という商業的な観点からの評価が重要なのかもしれないと考えられる。

駄作に対する美的評価

本研究より、美大生の駄作に対する美的評価は、経済的価値観と関連がみられなかっただけでなく、審美的価値観とも関連がみられなかった。

経済的価値観と駄作に対する美的評価との関連がみられなかった点について、経済的価値観とこれら美的評価との間に媒介変数があるのかもしれない。本研究では、経済的価値観と駄作に対する美的評価との直接的な関連のみを検討したため、経済的価値観が他の変数を媒介した上でこれら美的評価へ効果をもたらす可能性を排除できない。本研究では媒介変数を測定していないため以上の議論はあくまで推測であるが、経済的価値観が媒介変数を介し駄作に対する美的評価へ影響するという因果モデルのような現象がみられるのか、今後さらなる検討が必要であろう。

また、審美的価値観と駄作に対する美的評価との関連が示されなかったことから、美大生は必ずしも審美的価値観に基づいて駄作に対する美的評価を行っているわけではないと推察される。この結果は、前述の名画に対する美的評価と同様、芸術経験が美的な価値観を規定するわけではないこと（宮下ら、2016）の証左を示したといえよう。

まとめ

これまでの先行研究は、芸術経験のない大学生の中でも審美的価値観の高い者は絵画に対する美的評価が高いこと（宮下ら、2018a）、また、芸術経験のある美大生の中でも経済的価値観の高い者は絵画に対する美的評価が高いこと（宮下ら、2021）を示してきた。こうした研究背景から、本研究の目的は、美大生の絵画に対する美的評価は審美的価値観と経済的価値観のどちらがより関連するかを検討することであった。

研究の結果、美大生の名画に対する美的評価は、審美的価値観よりも経済的価値観と強く関連することが示された。本研究の結果を踏まえると、美大生は、名画を鑑賞する際、それらが単に有名で美しいから美的評価を高く行うのではなく、商業的な価値を重要な判断基準として美的評価を行うと考えられる。すなわち、美大生が経済的価値観に基づき絵画を評価する時、名画がどれほど高額であるのか、また、その名画は今以上に高値がつくのかという視点を重視していると推察される。例えば、Schmidt et al.（1989）は、芸術経験のある者は絵画鑑賞時に抽象的な構造を選好することを指摘している。この点を踏まえると、美大生は、一見すると何が描かれているか判別しにくい抽象画や複雑なモチーフが描かれた絵画などを好み、こうした絵画に高値が付くと考えていると推察される。

本研究の社会的意義について、本研究の知見は、美大生に対するステレオタイプ的な見方の打破に繋がることが期待できる。縣・岡田（2010）は、芸術家は「天才的な発想がある」「自

分たちとはそもそも違う」といったステレオタイプ的判断がなされることを指摘している。従って、美大生は何か特別な美的価値観をもっていて、それに基づき芸術作品を評価すると思われがちである。しかしながら、本研究は、美大生の名画に対する美的評価は審美的価値観よりも経済的価値観と強く関連することを示唆した。すなわち、美大生の絵画に対する美的評価は、何か特別な才能による美的判断と関連するというよりも、絵画作品に商業的な価値を見出そうとする判断と関連すると考えられる。こうした知見によって、美大生や芸術家の絵画に対する評価は、天賦の才によるものだというステレオタイプの打破に繋がる可能性が期待できるだろう。

最後に、本研究の限界点を述べる。本研究の結果より、経済的価値観と名画に対する美的評価との関連が示されたが、決定係数が低い（$R^2 = .02$）ため、モデルの説明力が高いとはいえない。そのため、価値観として経済的価値観及び審美的価値観の 2 つを取り上げた本研究の結果に限定していうと経済的価値観が名画に対する美的評価と関連したため、結果の一般化には慎重にならなければならない。今後は、価値観以外にも個人の芸術経験、美大へ至るまでの教育背景といった他の潜在的な変数も踏まえた包括的な検討が必要であろう。

付記

本研究の一部は、第 16 回日本感性工学会春季大会での報告内容をもとに、加筆・修正したものである。

引用文献

縣 拓充・岡田 猛（2010）．美術の創作活動に対するイメージが表現・鑑賞への動機づけに及ぼす影響　教育心理学研究，*58*，438-451.

Berlyne, D. E. (1974). Studies in the new experimental aesthetics: steps toward an objective psychology of aesthetic appreciation, Washington, DC: Hemisphere.

石坂 裕子・高橋 晋也（2006）．表現技法の教示が絵画の印象に与える影響―遠近法の歪みに着目して―　心理学研究，*77*，124-131.

北原 靖子（1993）．創造性をめぐる話　仲谷 洋平・藤本 浩一（編）美と造形の心理学（pp.148-163）北大路書房

筒井 亜湖・新堀孝明・近江 源太郎（2009）．絵画評価における新奇性とヘドニックトーン　基礎造形，*18*，7-12.

宮下 達哉・木村 敦・岡 隆（2016）．審美的価値観と美的評価の関係についての実験的検討（2）―美大生と一般大学生の比較―　日本大学心理学研究，*37*，28-36.

宮下 達哉・木村 敦・岡 隆（2018a）．審美的価値観は名画と駄作に対する美的評価と関連するか　日本感性工学会論文誌，*17*，561-566.

宮下 達哉・白川 真裕・木村 敦・岡 隆（2018b）．Big Five の開放性と美的評価との関連―媒介変数として審美的価値観に着目して―　日本感性工学会論文誌，*17*，251-256.

宮下 達哉・木村 敦・山村 豊・岡 隆（2020）．審美的価値観と他者作品鑑賞態度との関連　日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要，*100*，191-199.

宮下 達哉・木村 敦・山村 豊・岡 隆（2021）. 美大生は経済的価値観という視点から絵画に対する美的評価を行うか ― 名画と駄作を用いた検討 ―　日本感性工学会論文誌, *20*, 265-270.

酒井 恵子（2001）. 価値概念の個人差とその背景―価値尺度作成課題による検討―　教育心理学研究, *49*, 102-111.

酒井 恵子・山口 陽弘・久野 雅樹（1998）. 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討―項目反応理論の適用―　教育心理学研究, *46*, 153-162.

酒井 恵子・Takuya Yanagida・松居 辰則・戸田 有一（2018）. 価値志向性尺度における尺度項目間の順序関係の分析　教育心理学研究, *66*, 1-13.

Schmidt, J. A., McLaughlin, J. P., & Leighten, P. (1989). Novice Strategies for Understanding Paintings. *Applied Cognitive Psychology*, *3*, 91-100.

Spranger, E.（1921）. Lebensformen: Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit, 2. Aufl, Max Niemeyer, Tübingen（シュプランガー　E., 伊勢田耀子（訳）1961, 文化と性格の諸類型, 明治図書）

高野 陽太郎（2008）. 剰余変数の統制　高野 陽太郎・岡 隆（編）心理学研究法―心をみつめる科学のまなざし―（pp.90-119）有斐閣アルマ

Which do art students place more emphasis on the economic dimension of value or the aesthetic dimension of value? : An investigation using good art and bad art

Tatsuya MIYASHITA
Atsushi KIMURA
Yutaka YAMAMURA
Takashi OKA

The purpose of this study was to examine whether art students would evaluate paintings based on the economic dimension of value (EDV) or the aesthetic dimension of value (ADV). Art students (N = 230) were asked to rate 14 paintings (including seven good arts and seven bad arts selected from the Museum of Bad Art) on four scales of aesthetic evaluation. They were also asked to complete a questionnaire assessing their degree of the EDV and the ADV. Results of multiple regression analyses revealed that the EDV significantly related to aesthetic evaluations for good arts, whereas the ADV didn't related to aesthetic evaluations for both good and bad arts. These results suggest that art students place more emphasis on the EDV than the ADV for aesthetic evaluations of good arts.

Keywords: art students, aesthetic dimension of value, economic dimension of value, good arts, bad arts